

研究主題 「『多様な育ち』を前提とした学校システムの再構築」

～特別の教科「道徳」を切り口とした取組による実践研究～

新座市立第二中学校

1 研究主題の設定理由

従来から行われている集団を対象とした一斉指導に適応できない生徒が増えており、様々なひずみが生じている。それは、子育て観、家族構成、生活環境等が大きく変化し、必然的に子供の育ちが多様化しているにも関わらず、「集団」「一斉」を前提とした学校システムの上に教育活動を展開していることにその原因の一端がある。公立学校として、「集団」から「個」に重点を移し、可能な限り、多様化した事実に向き合う必要があると考えられる。また、本校で実施した不登校の要因ともなる「登校回避願望」調査を分析したところ、「一方的な人間関係への不満」が課題として示唆された。

そこで、「育ちの多様性」を前提とした学校システムの再構築を念頭に、日常の教育活動を中心に調査研究に取り組むとともに、道徳科の授業の充実はもちろん、全教育活動を通じて改めて「心の教育」に取り組み、社会の中で物事の善悪を判断する能力や心情を育む道徳教育の推進を図っていくため、本主題を設定した。本報告書は、2年間の実践と結果をまとめたものである。

2 研究の仮説

「育ちの多様化」からなる一人一人の「個」を把握し、それぞれが求めている支援に応えられる学校システムに再構築することで、道徳科の授業及び全教育活動を通じて「心の教育」を充実するとともに、課題である「一方的な人間関係への不満」に対する適切な支援を可能にすることができるであろう。

3 研究の経過

令和7年度	実施内容
4月 5月	今年度の研究計画の立案、課題研究の共通理解（全体・各部会協議） 校内生徒アンケート（登校回避につながる感情の調査等）実施・分析 hyper-QU 1回目実施・分析 校内研修 講義「子どもを心理的に支える教育活動の在り方～複数教員による効果的な指導について～」 指導者：浦和大学社会学部現代社会学科特任教授 安原 輝彦 氏 南部教育事務所・新座市教育委員会学校訪問、授業研究・協議会①
6月 8月	授業者指導案検討 指導者：新座市立栄小学校長 浅田 敦子 氏
9月 10月	校内研修 指導案検討会①（全体） 指導案検討会②（各学年・全体） 指導者：埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課教育課程担当指導主事 土井 鉄平 氏
11月	校内授業研究会②（道徳分野・3年、2年） 2年4組「美しい鳥取砂丘」（『中学道徳 あすを生きる2』日本文教出版） 3年5組「親友と語り合った『孤独の解消』」（『中学道徳 あすを生きる3』日本文教出版）

1 2月	指導者：跡見学園女子大学心理学部臨床心理学科教授 新井 雅 氏 埼玉県教育局南部教育事務所学力向上推進担当指導主事 坂井 貴文 氏 校内生徒アンケート（登校回避につながる感情の調査等）実施・分析、 hyper-QU 2 回目実施・分析 校内授業研究会③（道徳分野・1年、若葉） 1年5組「どうして？」（『中学道徳 あすを生きる1』日本文教出版） 若葉学級「紙ストローの導入について考えよう」（教員独自作成資料） 指導者：浦和大学社会学部現代社会学科特任教授 安原 輝彦 氏 跡見学園女子大学心理学部臨床心理学科教授 新井 雅 氏 埼玉県教育局南部教育事務所学力向上推進担当指導主事 坂井 貴文 氏 新座市立栄小学校長 浅田 敦子 氏
1月	研究発表会 校内研修 講義「子どもを心理的に支える教育活動の在り方～学校における心理的アプローチの進め方～」 指導者：跡見学園女子大学心理学部臨床心理学科教授 新井 雅 氏
2月	研究のまとめ、次年度研究計画検討

4 研究の内容

(1) 「チームUp道徳」の実施

それぞれの教員が教科の特質に応じた授業実践をすることで、生徒にとって多様な価値を学ぶ機会となる。本校では、チームUp担任制（複数担任制）を導入しており、3つのクラスを4人の教員が持ち回りで担任している。この学校システムに伴い、道徳においてもチーム内の教員で持ち回り、授業を行っている。クラスを担当しない週はその時間に授業を参観し、率直な感想や意見を伝え合い、様々な指導方法に触れながら授業スキル向上を図る場を設定した。

(2) ここみて！シートの活用

授業者は、授業のどこにポイントを置いて指導方針や授業展開を計画したかが分かるように「ここみて！シート」というシートを作成した。学習活動において、ねらいに迫るためにどのようにアプローチしていくのか、授業者は明確な意図をもってねらいに迫り、参観者はそれを事前に確認してから授業を参観する仕組みを作った。これは明確な意図をもつことで活動の形骸化を防ぎ、質的向上を図るねらいがある。参観する教員は「コメントシート」に授業を参観した感想や、授業者が重点を置いた視点に基づいた生徒との関わりが有効だったのかについてコメントを記述し、ロイロノートの共有ノートに掲示したり、直接用紙を授業者に渡したりするようにした。

授業内容についての意見交換や指導方法の工夫を教員間で共有する時間を捻出することが難しい中で、教員の個別の時間を有効に活用しつつ、多くの意見を共有できる方法を工夫した。

(3) 心理的アプローチ5視点を踏まえた授業実践

道徳の授業を実践する上で、どこに重点を置いて授業を考えていくのか、基準となる柱（5視点）を設定した。この5つの視点を持つことが、生徒の内面的な成長を支え、豊かな学びの場を提供するために重要であることを全教員に周知した。この5視点のうち特に重点を置きたい視点を道徳の価値項目と生徒の実態に

合わせて教員が選択し、本時の授業でどの視点に重点を置いてねらいを設定するかを考え、授業をデザインしていくようにした。なお、5視点は以下の通りである。

- ① **自己理解の促進**…生徒が自分自身の価値観や感情を理解することが重視される。これにより、自己肯定感を高め、自己理解を深めることができる。
- ② **共感力の育成**…他者の立場や感情を理解し、共感する力を育てることが重要である。これにより、生徒は他者との関係性をより良く築くことができるようになる。
- ③ **多面的・多角的な思考の促進**…道徳的な課題に対して多面的・多角的に考える力を養うことで、生徒は複雑な問題に対処する能力を身に付ける。これにより、柔軟な思考力が育まれる。
- ④ **道徳的判断力の向上**…善悪の判断や道徳的な価値観を基にした判断力を育てることを目指す。これにより、生徒は自分の行動を適切に選択し、実践する力を身に付ける。
- ⑤ **心理的安全性の確保**…授業中に生徒が安心して意見を述べられる環境を整え、心理的安全性を確保することが重要である。これにより、生徒は積極的に授業に参加し、自分の考えを深めることができる。

(4) 「彩の国の道徳」の活用、授業実践資料の蓄積

「彩の国の道徳『自分をみつめて』」を活用し、第3学年で「最初の公認女性医師・荻野吟子」（中学校C 公正、公平、社会正義）を総合的な学習の「性の多様性」と関連させ、「ジェンダー格差のない公平な社会」というねらいで実践した。また、「何だっていいんだあ」（中学校C 家族愛、家庭生活の充実）を第1学年で実施した。また、毎年2学期最初の道徳で、「命のたすき」の教材を活用し、命の授業を実施している。

(5) hyper-QUの活用

hyper-QUは「学校生活意欲」、「学級満足度」、「ソーシャルスキル」の3つの尺度から構成されており、子どもたちの学校生活における満足度と意欲、さらに学級集団の状態を調べることができる。道徳科では一人一人の特性を把握し、生徒理解を深めるために資料を活用し、学級集団の特徴を踏まえた授業展開を考えていくために活用した。個や集団としての特性を掴むことで、前述の心理的アプローチ「5視点」を意図的・効果的に選択し授業展開を考えることができる。

5 研究の成果と課題

(1) 成果

「規律ある態度」達成目標で「⑩話を聞き発表する」の達成率の変容は右表のとおりである。今年度の数値においては中1、中2は県平均を上回っている。さらに、昨年度との比

	中1	中2	中3
R6	72.2	77.7	83.3
R7	89.7	88.2	85.2

較でも数値が上がっている。学年を追った変容では中2が16%、中3は8.5%も伸びており、取組の効果が表れてきているとあってよい。Chromebook等のICTの活用はもちろん、ペアやグループ内で自分の言葉で意見を言う場面を増やした結果、苦手意識が減少した。また、発表後のフィードバックタイムで「いいね」「ありがとう」を互いに伝え合うことで、挑戦しやすい雰囲気形成了。生徒同士が意見を素直に認め合う経験が増え、全体発表への抵抗感も徐々に小さくなっている。「困っている友達への声かけ」や「助け合い活動」を授業や掃除当番に組み込み、互いを気遣う習慣が定着した。クラス内での小さな成功体験（荷物を運ぶのを手伝う、席替えで挨拶するなど）が積み重なり、安心感が広がっている。

	中1	中2	中3
R6 1月		84.2	80.6
R7 5月	83.2	85.5	82.9
R7 11月	85.0	88.5	87.2

非認知能力における各質問項目に対する「できる・ややできる」の回答は次の通りである。「②他人と『考え方』や『価値観』が違っていたときに、相手の立場になって考えることができる」では、上

表のようになっている。2年間の取組の結果、多様な価値に触れる機会が増えたり、相手意識を育めたりすることができたと言える。ロールプレイや話し合い活動を通じて相手の背景を考える経験を繰り返し蓄積できたと考える。非認知能力の視点において、各学年の8割が相手の立場に立って考えることができるようになった。

「心の教育」として道徳教育を推進していく中で、教師自身も生徒の想いを受け止める意識が醸成されたり、生徒達も相手の立場を意識できたりするようになってきたことの現れなのではないかと考える。

(2) 課題

全体的に肯定的な回答が増加した。しかし、③「生活の中で生まれた問題に対して複数の解決方法を持つことができる」の質問項目に対して、肯定的に捉えている生徒は6割に留まっている。学んだことを生活の中で活かしたり活用したりすることの難しさを感じた。

生徒の実態として、失敗体験が少なく、間違えることを極端に避けたり、解決案が現実的でなかったりする傾向がある。また、解決した実感を持てなかったり、解決できた経験が少なかったりすることも原因として考えられた。これは、一概に道徳の授業だけで培う力ではなく、学校生活全般において培うべき力である。今後は、他教科との連携を図り問題解決的な学習や教師の見届け等さらなる工夫が必要である。

教師の授業実践から、生徒の道徳的価値理解について深まっていると実感できない場面があり、社会一般で言われているような答えで留まっている意見も少なくない。生徒の中にある価値観や根拠を大事にしながら



ら、生徒の考えが深める中心発問や切り返しの発問を教師が考え、工夫することの重要性を再認識している。今後は、道徳科授業における更なる指導力向上に向けて、教員間のサポート体制を強化していきたい。